

昭和二十六年十二月十五日發行(毎月一回・十五日發行)
昭和二十四年七月十三日 第三種郵便物認可

(通第三十二号)

慈

光

第三卷 第十二號

目

人生問題の解決は
眞信の満足より建現す
…………… 近角常観 (1)

次

法華經讚仰
…………… 福島政雄 (6)

慈光録
…………… 花田(夫)正 (13)

人生問題の解決は眞信の満足より建現す

昭和十一年六月

近 角 常 観

近頃社会現象すこぶる奇矯を極め、外に発しては残虐なる刀刃沙汰となり、内に鬱しては政治陰謀の問題より、国際戦鬪の舞台に至るまで、変調を呈せざるはなく、思想問題、経済問題、家庭問題、あらゆる人生問題が変態を極めて居る。如何にして之を解決すべきかについて考察して見ようと思ふ。

今日世上の問題となりつつある政治上の改善、経済機構の改革、其他社会百般の施設を振興するの必要なることは言を待たざることなれども、吾人は宗教の見地に立ちて之を眺むるときは、確かに信仰の徹底によりて精神上の満足を與へ、此等人生問題を解決するの必要を叫ぶ次第である。

社会に統出する悲惨な出来事の多くは、生活問題に関する者が多い。従つて経済的に生活問題を解決するの急なるは勿論なれども、其一一の場合を検討するに、必ずしも一日を支ふべからずといふのではない。寧ろ其場合に処して困難に打ち勝ち努力奮闘する氣力缺乏するに原因するものがある。其

ない、富者は其富の処置について煩悶して居るのである。相對問題として煩悶することは同一である。して見れば思想的にいへば、此人間界の相對問題を解決せねば、徹底せる満足を得ることは出来ぬ。

従来吾人は人生相對問題について、善惡共に結局罪惡たることを自覺して、絶對大悲の救済によりて解決せねばならぬことを屢々論じた次第である。今や進んで、あらゆる人生相對の問題に押し広めて詳論して見ようと思ふ。

人生の出来事、善きことも悪しきことも、個人の性格、境遇の如何、周囲の事情、事件の成行等、等、複雑なる社会事情が織り成して出来するものである。平常は自由自在に自分が心の儘に行動するが如く心得るも、一朝行詰つてくるときは如上の事情が綜合して、一分一厘も動きのとれぬやうになるものである。此時に際してかくかくすべしといふ命令は何の役にも立たぬ。世の所謂律法的教訓は其効力を失ふ次第である。此時に際して、其一分一厘動きのとれぬことを明察して飽まで同情して、遂に其繫縛を解脱せしむるものが、即ち絶對の大悲である。

此の如く善きことも、悪しきことも、種々の事情によりて一分一厘動きのとれぬ様になるのが即ち善惡の業報である。勿論過去世より現在に至るまでいろいろの事情に支配せられて、善惡の行爲をなすのである。之を數異抄に「よきこころ

多くは他を呪ひ人を敵視するものがある。殺傷と自殺とは畢竟積極と消極の別と謂はねばならぬ。

此の如く仔細に考察すれば、生活問題すら随分、我他彼此の争鬪に原因するものが多い。況んや政治社会、国際争鬪の現象に至りては、権力、武力抗争の極、変態を極めざるはなく、益々出でて益々乱調子なるは、確に精神問題の不満足、思想問題の不徹底が、其主なる原因なりと断言して憚らざる次第である。

其他、家庭問題といひ、同僚の軋轢といひ、あらゆる人生問題は相對的問題ならざるはない。相對問題といへばとて、互に抗争對度を取るばかりでなく、或は義理といひ、人情といひ、互讓的、相對的態度を取るのも相對問題である。物質上に就きていへば、田あれば田あることを憂へ、宅あれば宅あることを憂ふ。又田なければ田なきことを憂へ、宅なければ宅なきことを憂ふ。經濟上貧者ばかりが煩悶して居るのでは

のおこるも宿業のもよほすゆへなり、惡事のおもはれせらるるも惡業のはからふゆへなり、故聖人のおほせには、卵の毛羊の毛のさきにゐるちりばかりも、つくる罪の宿業にあらずといふことなしと、知るべしとさふらひき」とある。

全體業報といふことは、善惡の行爲、自分ながら一分一厘動きのとれぬことである。然るに世間一般は誤解して、善きことをしても、悪しきことをしても、業報まかせであると思つてゐるものがある。善いことも悪しきことも自由に来るならば、業報まかせではない。むしろ業報に支配せらるるゆへに、よきことをせんとするもする能はず、悪しきことを止めんとするも止むることの出来ないのが業報である。此の如き場合には、其自由に出来ないことを洞察して、憐れんで下さるのが何より有難い。これが人生相對の善惡業報に対して絶對無限の大悲があらはれて下されたのである。即ち大願業力の不思議といふのである。

此に於て吾人は其本願の不思議について、積極的に高調して見ようと思ふ。世間に他力といふことを甚だ誤解して居るややもすれば他力まかせといふは、何事もせず手を拱いて無力であるかの如く考へて居るものがある。是は大なる誤である。既に一分一厘動けぬものならば、自分は無力たることはいふまでもない。其一分一厘自力なき者に対して、他より大慈大悲の絶對力を加へて下さるから他力である。かかるが故に親鸞聖人は、他力といふは如来の本願力なりと仰せられ

である。蓮如上人が「他力といふは他の力といふところなり」とあるも、同じく積極的の力の加はることである。それ故に他力廻向といふのである。

親鸞聖人が此本願不思議の積極的他力を示されたる和讃に

本願力にあひぬれば、

むなしくすぐる人ぞなき、

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし。

とある。こは如何に大慈大悲の親心は、かの業報の者に対して飽くまで満足せしむべく、真心徹到して下さるかを示されてある。

既に我等が善悪の行爲、一分一厘動かすことの出来ないことをみそなはして、之を悲憐して下さるといふ點が、自力より他力に転廻する枢軸といはねばならぬ。何となれば、既に一分一厘動きのとれぬ者に、よくせよ、悪しくするなといふ自力律法の教訓は無効である。既に無効たることを認むる以上は、「本願を信ぜんには他の善も要に非ず、念佛にまさるべき善なきが故に、悪をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの悪なきが故に」といふ、大積極的の大慈大悲の絶対の佛日が輝きて、相對的善悪業報の夜中の冥暗を照破したまふのである。此絶対大悲を体験せねばならぬ。

私が人生問題に苦みて、他に対して、如何にしても隔て

で見捨てぬが如來の清淨真實である。たとひ如何程多くの濁水も、無限に清淨真實の御慈悲を加へて下さつたならば、如何なる濁水も遂に隔てなく如來の御慈悲に融かされ、攝取せられるのである。これを「功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし」といふのである。

此の如く無限に隔てざる如來の真實に充実される時は、如何なる空虚なる人生も満足するやうになるのである。而して口に溢れるものは念佛である。これが即ち「彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひたつ心のおこるとき、即ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふ」のである。即ち満足の結果溢れ出づる念佛は即ち功德の大宝海である。此の一念に如來の光明中に攝取せられるのである。

信卷上の終に引用せる樂邦文類の後序に、「疑愛の二心をして、了に障礙ならしむるものは淨土の一門なり。未だ始めより間隔せず、彌陀の洪願、常に自ら攝持し給ふ、必然の理なり」とあるは、如何にも真心徹到して人生に大満足を與へたる消息と云はねばならぬ。

是が本題に「人生問題の解決は眞信の満足より建現す」と言ふ所以である。即ち人生における諸々の空虚が充実せられ善悪相對の諸々の煩悶が満足せらるる時は、自然に平和なる人生が建現して、現生に種々の利益を持ち来されるのである

心の止まぬことに泣きたる時、其一分一厘隔て心の止まぬことを見て下さる同情者が欲しかつた。其隔て心の止まぬのを見をなはして、可哀さうに思うて下さるが大慈大悲であつた既に隔て心の止まぬのを、可哀さうに思うて下さる以上は、汝の方よりは隔てるであらうが、われは可哀さうと見るからは、五分五分に隔てざるのみならず、益々無限に隔てざる心を以て汝の隔てを融和するであらうといふが、我等が業報をみそなはして其點を枢軸として、加へて下さる本願他力の積極力である。

「本願力に遇ひぬれば、空しくすぐる人ぞなき」といふは人生に於て善悪業報に支配せられて、全く空虚であることをみそなはして、しかも佛より来り求めて我等に遇うて下さるのである。一度遇ふ以上は、衆生を助けずんば、正覚なるまじといへる誓なれば、飽まで其空虚を充実せずんば止むまじといふ親心である。即ち汝の隔て心の止まぬのを可哀相と見る以上は、我隔てざる心を以て汝の隔て心の障壁を破つて、佛の大慈大悲の隔てなき光明中に攝取せずばおかぬといふ本願である。「功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし」といふのがこのことである。

我等が心は不清淨不真實の濁り水である。然るに如來の清淨真實の功德の大宝海水を加へ給ふのである。決して不清淨の心を清めよといふのではない。我等が不真實の心は一分一厘清まるものではない。その不真實、不清淨を憐みて、飽ま

即ち親鸞聖人が信卷下の初めに「金剛の真心を獲得する者は横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を得る」と云ふて數へ挙げられたるもの、即ち是れ人生問題の解決と云はねばならぬ。

十種の益の大略を申せば、冥々の間に靈界の祐助を蒙ること、歴々として疑ふべからざるものがある。是が眞衆護持の益である。又自然法爾に、有形無形の功德が持ち求されるのである。是が至徳具足の益である。此くの如く我等不實不清淨の心が如來の清淨真實の心によりて充実される時は、煩惱の水解けて功德の水となるのである。是が転悪成善の益である。此くの如く如來の眞實心を得たる以上は、あらゆる佛菩薩の守護を得るのである。是が諸佛護念の益である。既に不治の難病を治療し給ふ大名医の妙薬を用ひたのである。あらゆる医者が是を証明讃歎するのである。是が諸佛稱讚の益である。是等は畢竟絶対の眞理は世界到る所通ぜざることなく如何なる国民も是に帰服せざるものなしといふの道理である。此くの如く一度攝取不捨の利益にあづけられた以上は、二度退転して後戻りすることは出来ぬのである。是が心光照護の益である。此くの如く胸中の煩悶が融かされて、踴躍歡喜の心が溢れるのである。是が心多歡喜の益である。既に此くの如き大安心を得たる以上、唯感謝報恩の念が油然として湧き来るのである。是が知恩報徳の益である。

人生問題を徹底的に解決し終らなんだならば、猶爲すべき

種々の自力雜善の爲に煩はざるのである。然るに絶対他力の爲に徹底的に人生を解決する時は、唯感謝の生活となるのである。是を親鸞聖人は化身土卷に「真に知んぬ、專修にして難心なる者は大慶喜心を得ず。故に宗師は彼佛恩を念報することなし、行業を作すと雖も心輕慢を生じ、常に名利と相應するが故に。人我自ら覆ふて同行善知識に親近せざるが故に。このんで雜縁に近づきて、往生の正行を自障障他するが故にと云へり」と仰せられてある。是れ相對的信仰の不徹底に比較して、眞実の信仰の絶対的なることを示されたものである。それ故に本題に吾人が特に眞実の満足と云うた所以である。

此くの如く絶対の信仰に入れば自然に称名念佛せらるるのである。是が即ち常行大悲の益である。如くの如くの一念の徹底に依りて、如來の眞實心を廻向せらるる故に、必ず成佛するに定まりたる仲間に入るのである、是が入正定聚の益である。

略文類には「亦た現世無量の徳を獲る」とあれば、実は十種と限りたのではない。聖人が感嘆のあまり一往十種の益を教へられたもので、実は無量無限の益を得るのである。要するに絶対信仰の満足は、人生問題のすべてを解決し了せりと云ふべきである。何となれば人生善惡業報の相對問題を、大願業力の絶対の大慈大悲を以て解決し了りたからである。

併し此に注意すべきは、絶対の信仰といふことは、決して

法華經讚仰

今晚は法華經の御話を申し上げます。このお経は広大なもので全体はとて申し上げることが出来ませぬから、法華經の中心、つまり大事などころだけを申し上げて見ようと思ひます。

私自身としましては二十四歳の春に始めて法華經を読みました。これが佛教の御經の読み始めであります。当時日蓮上人に熱心になつてゐた、めであります。それから何時も申すやうに二十六歳の夏七月からはつきりと親鸞聖人の信仰に近角先生のお陰で転じさせてもらひました。それから眞宗關係の淨土三部經や七高僧方のものや教行信証などを讀み、又聖人のよくお讀みになつた華嚴經のところどこを讀みまして、二十年近く法華經とはなれてゐましたが、四十歳を越えまして聖徳太子の信仰について聖人のお蔭で目を醒まさせて頂き、聖徳太子の御精神がわかりたいので大和の法隆寺にこもり佐伯定胤殿下から次から次へと太子の御讀み下された色々のお經の講話をき、ました。

昭和八年の夏でした。法華經について八日間五十人位こもつて御講義を太子の御注釈によりまして聞かせてもらひました。その時非常に感激した氣分になり御講義が有り難く涙が

我佛と共に在りと高上りすることではない。現生の利益と云ふことは、必ずしも有形物質の利益と云ふことではない。たとひ地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふと覺悟することである。此の覺悟あつて、如何なる困難の中にも生くることの出来る大活力を生ずることである。とても地獄は一定すみかぞかしと、罪惡自覺を生ずることである。かくてこそ如何なる人に対しても懺悔、懺悔の心を生ずるのである。此の落ち心地あつて、人生に絶対的秩序觀念を生ずるやうになる。是れ眞信の満足に依りて建現したる、人生問題解決の要点である。

信界建現より。

露の世

樂しみ極りて愁ひ起るは浮世のならひなれど、未だ樂しきも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛なるみどり子を、寢耳に水のおし來るときあらあらしき痘の病に見込まれて、終に六月二十一日の卯の花と共に此世をしほみぬ。母は死顔にすがりてよよと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行く水の再び帰らず、散る花の梢にもどらぬ事などをあきらめ顔しても、思ひ切り難きは恩愛のきづななりけり

露の世はつゆの世ながらさりながら 一茶

福島政雄

出るやうでありました。その時始めて法華經の方便品の心持が私の心にわかりはじめ、かくも深い御心持であつたかと驚きました。それから後太子の御精神により法華經を始めて讀むやうになりました。

さて、二十四歳の春から讀み始めまして以来法華經の中で心を牽かれてゐたのは、經の中に比喩が六つか七つあります。その内に染みしたのは長者窮子の比喩でありました。長者とは大福長者であり、窮子とは落ちぶれた子であります。このたとへを一応申しませう。

或る長者に一人の男の子があつた。それが大分大きくなつてから父の長者を捨て、家出して行方をくらましました。それから家に歸らぬばかりでなく自分に親があることさへ忘れてしまつて、あちこちと流浪してさすらひ歩きながらおちぶれて日傭人夫となつてゐました。子は親のあることを忘れてゐるが親は子が忘れられずどうかしてめぐり合ひたいと思つて、ある都に立派な邸宅を造り、若しか子がめぐりめぐつてこの都を通るかもしれぬと思ひ、邸宅から常に道行く人々を眺めてゐた。

子はそれを知らぬが何となしにそちらへ足がむいて、父の

住む都にやつて来て大きな邸の門前を通り過ぎた。父は毎日外を眺めてゐたがそれが子であることを直に知り、二人の召使に命じて「おちぶれた若者をつれて来い」と言つた。

二人の者が若者を捕へると若者はひつくりして「自分は捕へられてどんな事をされるかも知れぬ、殺されるのかも知れぬ」と驚きのあまり氣絶してしまつた。これを見た親は「水を顔にふきかけて生きかへらして放してやれ、もう連れて来ぬでよい」と命じた。

若者はやれやれたすかつたと御礼を繰り返しながらよろこんで去つて行つた。そして附近で賃仕事に傭はれてゐることを知つた父の長者は、若者と同じ様に瘦せた召使を呼びこれにボロの着物をつけさせて「若者を連れて来い。賃仕事は塵あくたの掃除をするのだと伝へよ」と命じた。瘦せた使者は隣村で賃仕事をしてゐる窺子に近づき、「もう少しよいところがあるから来ないか、仕事はちりあくたの掃除だ」とさそひ出したので若者は安心して長者の家に入つた。

その日から父は掃除夫として窺子を使ひだんだん引き上げて行つた。その間長者は自らみすほらしい風態をして子供に近づき、「お前はよく働くからよい仕事につけてやる。自分は子がないからお前を子のやうに思つてゐる。」と慰めたり励ましたりして遂には金銀財宝の一切の出納係に引き上げた。

然し子供は何も知らないから、知らぬ人がよくも親切にして下さるとよろこび段々に心がひらけて来た。

御馳走をすることは不満だ。」と言ふ。父は「そう言ふな、お前はもともと自分の所にある父の持物は皆お前のものだ。弟は死んだと思つてゐたのが帰つて来たのだ、親としてよろこばずに居られない。さう不平を言ふな。」と言ふ様になつて居ります。

法華經の窺子の譬とルカ伝の蕩兒の比喩とを照らし合せますと、一寸はルカ伝の方が感じ易いが、段々と味うてゐると法華經の方が深いことが知れて来る。

蕩兒は親を忘れてゐないで親のところへ歸つて来る。窺子は親のある事さへ知らないで、親の門前を通つてもさう思はず引き寄せられても氣がつかぬ。親の死にのぞんで親といふものに氣づく。

そこにキリスト教と真宗の心持が味へる。私共は親を忘れて、さ迷うてゐる。親はないものだ、いや親といふものさへ考へてゐないのに佛の方から無量の方便をめぐらして下されて、親はかうしたものと氣づかせて下さる。そこに佛の願力の無量無辺が味へる。蕩兒の譬より深いものがあり、私の現在の有様にピッタリあたるものがある。

私の身の上にしみてゐるのは、私が三十二歳の時母が五十五歳で死にました。私は母に非常に愛着し、母も私を非常に可愛がり、殊に私の兄が死にましたあとすぐに生れたものですから全く甘えつ子でゐました。そう云ふ状態でありましたので、母の死は非常にこたへました。当時広島に居りましたので急いで歸りましたがすでに母は死んで八・九時間たつて

その後長者は大病になり今度は死ぬるに違ひないと思ひ、病室に親類縁者呼び寄せて始めて親子の名のりをした。

即ち「これは私の眞の子である。長い間自分を捨て、居たが久しく歸りを待つてゐる内にわが子を見つけ、今日迄かくして色々と育て上げたが私の死後は私の持物の總てをこの子に譲ります。」と遺言した。そこで窺子は非常に驚き、この一切の財宝を皆自分に貰つたことがうれしくてたまらず「自分は求めもしなかつたのに家や財産や金銀の宝物を我が身に得ました。」と大いによろこんでゐる。

この比喩は最初に法華經を読みました時心に染みました。これとよく似た譬が新訳聖書のルカ伝にあります。この「蕩兒歸る」の譬を一応申しますと二人の兄弟があつた。弟の方が父に早く財産を二分して呉れと頼み、預けて貰ふと早速それを持つて父を捨て、家出してしまつた。そのうちに財産をつかひはたしてしまひ、色々苦しむ、饑饉にも出會ひ、食ふ物も食へぬとなり、困りはててある牧場の傭人となつたが腹がへつてゐるので牧畜の餌をさへ拾ひ食ふといふ程に困り果てた。そこで親を思ひ出し、あやまつて親許に歸れば許して呉れるだらうと思つた。この蕩兒は親を忘れてゐないのであります。かくて死んだでもあらうと思つた末子が親許に歸つたので父親は非常によろこんで上等の豚を殺して御馳走しようと言ふと、兄は甚だ不平で、「自分は毎日親に仕へて真面目に働いて来たのに御馳走して歓迎されたことはない、弟は財産を蕩尽して落ちぶれて歸つて来たのに父がこんな

居りました。母のなきがらを見ましてもほんとうに死んだと思へません。葬儀がすみましてもその通りで、その後十年間ばかりは母の幽霊の様なものが私の身辺につきまといつてゐるいふ感じでした。死んだのではない、何処かに居るといふ感情がついてゐました。

その後四十二か三歳の頃白樺祖山先生が広島島の寺で法華經の話を読まれたので私も聞きに參りました。その時、長者窺子の譬を懇切丁寧に訓へられ、その時、これは譬であるから親が死ぬ前に金銀財宝などの一切をゆづるとあるが實際の關係では親の「生命の全体」を金銀財宝に譬へてあるから、我々がこの世から親を失ふとなると、親はこの世の生命の終る息を引取る瞬間から子供等の生命の中に入り込む、一人一人に全体の生命が融け込む、五人が五分に分けるのではない、十人居れば十人の一人一人に全体の親の生命がはいり込むのですと先生から伺ひ、それが心に染むとまつはつてやまぬ母の幽霊のやうなものになつた。これは私の心に描いた妄想であつた。実は十年前母の死と共に自分の中に全生命が入り込んで下された。母の全生命が佛の尽十方の無碍の光明と同じで佛の光背の様にびつたりとして私の生命の光背となつて私の生命を護つて居て下さるとハッキリわかり、親はこの世の生命を終ると共に尽十方の無碍の光明と一味になり、親か佛か、佛か親かとなり、私の生命の光背となつてまもり通して下さつてゐる。別に母が佛法者であつたといふわけでもないが、母の生命が終ると共に私にとつて尽十方無碍の光明

と一味になつてゐる。母が辺地・胎宮・憚慢界にあるとは思はれませんが。佛陀の生命と一味になつて私に交流してゐる、それは生前よりか死してからの方がよりハッキリして佛の生命と一になつて私に生きて働いてゐると身の上にひしひしと感じました故に、母が生前に佛法に親しんでゐたかどうかは問題でなく、私の生命の上に生きて働いてゐる、と白杵先生からこの長者窺子の譬によつて深く教へられました。私の立場はどこまでも窺子である。親を忘れてゐたものが、佛の無限の方便から親のあることを知らしめられた。斯うした眞宗の有り難いことを四十二・三歳の頃から味へるやうになりました。

又私の四十三歳の七月二十五日に高松のそばの塩江といふ所、そこは敏泉の出る所ですが、そこで高松の酒見さんから句佛上人問題を何けなく聞いてゐるにつけ、それは上人の問題でなく自分の問題として深く味はひました。私の三十時代は殊に女に迷ひましたが、その迷ふ姿と親の心が一味になつて私のために苦勞して下されたのを感じて、迷ひの私と佛の御心がハッキリと見えて来始めました。

以上が窺子の比喻によつて私の氣づかせて貰うたことでありませう。

次に法華經の一番大切な比喻は火宅三車の譬であります。

これは比喻品に出て居ります一応筋を申しますれば、

或る長者があつた。その長者は年老いて衰へてゐるが財産は無量に持ち田や畑や召使なども多敷あるが、長者の家の門

を火が燃えてゐる、猛獸毒蛇がある。これは娑婆に生活して煩悩を持ちそれに苦んでゐる。我々はその中にありながら煩悩を煩悩とも知らず、苦みを苦とさへ思へぬ。苦を分けて三つとされてゐる。苦苦・壞苦・行苦で苦苦とは現に苦しいと感じ、壞苦とはこれは行く苦である、行苦とは一切のものが移り變つて盛衰・生死・無常流転の苦である。かうした苦の中に居りながら苦と思はず樂と思ひ、やがて苦であるのに今楽しいと思つてゐる。一向に家を出ようとはしない。

三つの車、羊・鹿・牛車とは、声聞乘・緣覺乘・菩薩乘のことである。声聞乘とは佛の教をそのまゝ受け取り実行する人々で、自分独りの覺りを開く人である。緣覺乘とは緣によつてさとる。佛の教を聞かぬでも落花等を見てそれを緣としてさとる、かく考へて自分独りさとる落ち着けばよいと思ふ人である。菩薩乘とは自分が独りさとつたのではすまされぬ他の人をもさとらさねば心が落ちつかぬと云ふのが菩薩の立場である。前二者は自分独りの覺りであるから小乘、菩薩は自他共であるから大乘である。

大乘と小乗の教を佛は垂れ給うて我等を喚び醒さうとなさつた。然しいよいよといふことになると大白牛車を平等に與へる「一佛乘」であつて、佛の覺りを聞かせる爲である。声聞・緣覺・菩薩の三乘は皆佛の覺りを開かせるので、これが大白牛車の比喻の意味である。

こゝに問題は大白牛車を長者が子に與へた。羊・鹿・牛車は初めに云つたがそれを子供に與へてゐない。それでは子供

は一つであつた。住む人は百・二百・三百と沢山あつた。家は古く朽ち崩れ、虫がついて梁は傾きかゝつてゐた。しかも火がこの家について燃え始めてゐる。長者の子は十・二十・三十、約三十人もゐてそれらは危険を知らずに遊んでゐる長者が家にかへつて見れば火がアチラからもコチラからも出てゐる。自分は外に居るから安全であるが子は遊び呆けてゐて火事を驚かず恐れぬ、火が焼け付き近づいてゐるが子は出て行かうといふ風な様子がない。そこで長者は考へた。

「自分は力が相当あるから乗物に乗せて引つ張り出せないではないが、一ツ困難な問題は門が一つで狭く小さい。子供では何も知らずに遊びたはむれてゐる。だから子供に火の恐しさを自覺させなければならぬ。火事だ、早く出よと言つても子供は遊び呆けて出ようとしなない。火とは何であらう、家を出よといふが家とは何であらうと云つて一向出ようとしなない何とかして子供を出さねばならぬ」と。

そこでオモチャを思ひ出し「羊・鹿・牛の車がある、早く出よ」と云ふ。子供は始めて親のいふことに引きつけられて我勝ちに一つの門から出ようとする。

子供が家を出て皆が安全になつたのを見て父親は始めて落ちつくが、子供達は羊・鹿・牛の引く車をくれと求めると、大きな白い牛の引く金銀で飾り立てた車を一人宛平等に子供に與へた。

以上が火宅三車の比喻であります。

この中の先づ「火宅」とは娑婆世界であり、苦の世界であつたのかといふと、法華經の心ではこれはだまされたのではない。これは羊・鹿・牛車は大白牛車にもつてゐる、佛の覺りの中に三種の覺りもつてゐる。三つは結局佛のさとりになつて行く。かうなつて行くとだまされたのではない。すべてが眞実である。「嘘も方便」といふのでなく、方便の中に眞実がこもつてゐる。鹿・羊・牛車といふ中に大白牛車がこもつてゐる。三車と云つて呼びかける声の中に大白牛車を與へるといふ一つの大きなことがこもつてゐる。聞声・緣覺・菩薩の三つの姿を仮りにあらはしても、声聞乘のまんまが佛のさとりに通じ、緣覺乘の姿のまんまが佛のさとりに通じ、菩薩乘の姿のまんま佛のさとりに通じてゐる。これは佛の一つのまことが夫々の中にこもつてゐる、あらはれてゐる。

これを世俗にひきあてると、日本国民として夫々仕事を持ち姿かたちも異り、八千万の人々がそれぞれ異なるが、日本人がまことの道に生きるのには、八千万の人々のそれぞれに姿・形・心の異なる者がそのまゝにまことの生命に帰依して行く。八千万の国民が天皇陛下のまことを我が身に受け銘々の仕事にいそしんで行く、実業・農業・政治等等夫々の姿をかへないでその姿の上に陛下の御眞実を頂いて、そこに和ぎある根本の心持がわいて日本国の国民の働きが成り立つ。夫々の国民が唯自分勝手な心でゆくと、政治界も実業界も教育界も夫々争ひが絶えないが、その和く根本は銘々がその仕事を守りながらまことの生命、永遠のまことの道につながつてゐる。

そこに天皇陛下があらはれて下さつてゐる。中心になる御縁となつてゐる下さる。八千万は夫々の仕事姿のまゝ、久遠の眞実に帰依することによつて久遠の眞実があらはれて来る。

そこに日本が和ぎ、これを世界にあらはせば、日本・独乙・米國等々夫々にその姿の上に独特の姿を持ちあらはしつゝ、久遠眞実のまことに帰し、久遠眞実が各國の上にあらはれて来る。これによつて戦争のない世界になる。これまで来ない戦争のやむ時はない。この氣持を方便品であらはして居られる。これを我々銘々の上に頂くとかういふことであります。聖徳太子の方便品の註訳に万善同歸といふ言葉がある。よろづのよきものは同じく一つのものに歸して行くといふ意味である。我々の生活ではよしあしで日暮してゐるが、我々のよしとするところが徹底してよいかといふに明日になると悪いとならぬと言へぬ。我々の生活は相對五分五分のことばかりやつてゐるが、我々がよいといふものが存外つまらぬ、悪いといふものがそれ程でないかも知れぬ。佛の眞實心は惡を善とし善に転ぜしめて和ぎあるやうにしなればやみ給はぬ、これが佛のまことである。

佛の働きとは我々の善惡の一切を善に転ぜられて、佛の方から引きのばして下さる。これを我が身の上に受けると、我々の出来る働きと姿の特殊性を發揮しながら、その姿を佛が眞實の生命の中に攝取して捨てない。我々の特殊な生命と働きの姿の上にまことの働きを受けて私の私たるものとして生きて行ける。

慈光

慈光はるかにかぶらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を帰命せよ。

この和讃は阿彌陀佛の一念一利那も清淨ならざるなく眞実ならざるなく、忍力成就して衆苦を計し給はぬ御徳力の自然として十方微塵世界に放ち給ふ十二光の中の歡喜光の御はたらきを親鸞聖人が隨喜讃仰された一首である。先づ聖人の左訓を頂げば

慈光・あはれむひかり。慈は父の慈悲にたとふるなり。

法喜、法をよるこぶなり。歡喜光佛を法喜といふ、これは

貪欲、瞋恚、愚痴の闇を消さむ料なり。

大安慰、彌陀の御名なり。一切衆生の歡喜、憂へ、惡きこ

とを皆失うて安くやすからしむ。

誠に御親切あふれる御註釈である。御教に照されて我身を省みるに、現に貪、瞋、痴の煩惱に常に覆はれた暗黒と罪濁の生活である。然もそれは遠くはるかな昔から纏綿として続き、滔々と流れ来つてゐる、如何に藻擱き如何に焦慮しても一分一厘如何ともなし得ぬ身である、この必然の結果は地獄

世間に雷動するのでは駄目です。自分の特殊な姿、生命の上に久遠のまことを受けて行くところに方便の花が咲いて美しく輝く善と美とが開ける。これは佛のまことの生命が私の姿に生きて働いて下さるのである。以上のことを万善同歸といふ言葉に、おいて味はれます。

法華経は廣大無辺な世界であるが、佛のまことを味ふとは廣大無辺なことであると知らされます。

大休方便品の大切の精神を申し上げました。その他に寿命品があります。それは佛の生命は久遠の生命である、非常に永い佛である。釈尊は八十年だけの生命ではない、久遠の生命である、といふことを説かれてあるのが寿命品である。こゝに一切を生かし調和して行かれる方便品の背景がある。

なほ普門品がおる。これを味はふのも大したことであるが今日は二つの比喩から廣大な佛のまことを申し上げました。

魂のかび

昔昔、清き泉のむくむくと涌出る別荘をもちたる者ありけり。たやすく人の汲みほさんことをおされて、井筒の廻りに覆におほひを作りてつらつら年を経たりける程に、いつしか垣も朽ち、水もわるくなりて、茨おどろおのがさままにしげりあひ、蛙子子とこころ得顔におどりつつ、つひに人しらぬ野中の埋れ井とぞなりける。此道こころさすも又さの通り、よりより魂のかびを洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼臍き俳諧となりて、果は夫さへも喰らはずなりぬべきされど己が水の喫きはしらすで、世をうらみ、人をそしりて、ゆくゆく理屈地獄の苦しび免れざらんとす。

しなのの国乞食首領 一茶

録

花田正夫

餓畜畜生の世界を無限に織りなして行くばかりである。仰いで惟れば法藏因位の御修行はかかるあさましき我身の故に続けられ、彌陀久遠の慈光はこの身の上に現れて下さるのである。

底のない貪りの心に迷ひに迷ひ、濁りに濁る身に清淨の光明を注ぎ給ひ、愚痴に閉ざされて心かたくなになり一切の人々から捨て去られる身に智慧の光明をとどけて下さり、怒りの焰に身心を焼き焦す身に歡喜の光明を以つて攝め取つて下さる。ここを聖人は、「貪欲、瞋恚、愚痴の闇を消し、一切衆生の歡喜、憂へ、惡きことを皆失うて安くやすからしむ」と御解釈して下さつてゐる。

近角常觀先生の詩にも

慈光はるかに照す処、法喜悲歡を破る

一掬清流の水、旅人慰安を得。

と、この和讃を讃仰せられてゐる。これ全く彌陀佛の我等が三毒の煩惱熾盛なるをみなはし給うて「三惡道なき國を建立し、再び三惡趣に更らしめじ」との本願大悲の顯現であり、白道の旅人、念佛者の日々蒙る無限の慰安である。歡喜抄には「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎま

るらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心も出でくべし。すべてよろづのことにつけて往生には賢き思を具せずしてただほれほれと彌陀の御恩の深重なること常におもひ出しまらすべし、しかれば念佛も申され候、これ自然なり云云」と訓へられてゐる。「わろからんにつけても」とは、腹を立て悪しざまなることを犯す私共の罪業のやまぬにつけても、といふ意味である。「いよいよ願力を仰ぐ」とは、腹を立て悪しざまなることを犯すにつけて、我々の自性としては他に責を負はして自己弁護して見たり、或は内にその煩惱の烈しさを歎き悲しむで、大いに修養せねばならぬと力むで見たり、或は見まい聞まい言ふまいと三猿を手本にして外縁を断つことにつとめたり、其他種々な方面に腐心するのであるが、元來努力といふものはその心が持続してゐる間こそ多少効果もあるが、人間は永い努力には根柢負けをしてふもものである。又努力してゐる間は、無理に心を押へてゐるのであるからその苦勞が認められないとなるとすぐ爆発する。かと言つてほつておけば自ら害し他を害してやむ時はない。「底なしの沼に落ち込むと、藻掻けば藻掻くほど沈んで行く」といふが、煩惱はまことに沈むをさだめとした底なしの泥沼である。こゝとに瞋恚の煩惱と云ふものは「迅風より速し」と佛が説かれてゐる通り心の扉に手をかける暇もない。ハツと氣着いた時はもう飛び出した後の祭である。私がこのことを強く感じるのも、心臓病で昨年春から思ふやうに他出の出来ない生活をしなければならぬ業縁に催されて、元來身に持つた瞋恚の煩

あなた任せのとしのくれ

那王子の心に浮んで消えないのが父の顔とその遺言である。王子は遂に刃を捨てて梵達王に一切を懺悔し、梵達王も亦王子の眞情にうたれて長く親しい交を結んだ。この説話が私の胸に沁む。即ち短刀を抜く王子の姿が私の姿である。そのことあるを見抜いた長寿王の悲涙あふるる遺言、この全体が現に、この和讃を頂き、歎異抄のこの句を思ひ浮べる私の姿である。

かくてすさみにすさみ、狂ひに狂ふ私の煩惱の中に、彌陀佛の悲涙があらはれて下さるのである。聖人はこの燃えさかる焔の私に「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」と寄り添ひ給うて「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまらせよ」と佛の慈心をさへて下さるのである。

涅槃經に「慈悲隨逐して頼子の如し」とあることを白井先生が特に御訓へ下さつてゐるが、佛の慈心は恰も仔牛が母牛に隨逐する如く一切苦惱の衆生に常に添ひ給ふと述べられてゐる。三毒の煩惱の熾盛なる者に佛は常に清淨、歡喜、智慧の光明を放ち給うて護り哺んで三惡道なき淨土にまで導き入れて下さるのである。その護念力が現にあらはれて、「しかれば念佛も申され候」と感佩申すことである。

悩が燃え熾る烈しき強さに全く閉口頓首せしめられてゐるからである。そこに自然に歎異抄のこの言葉を想ひ、この和讃を憶ひ浮べずには居られないのである。ここに聖人を通じて私の心にひびいて下さるのが「荒れに荒れ、狂ひに狂ふ私をして必ず柔和忍辱ならしめずばおくまいとの彌陀佛の御誓であり、御涙である」。又「乱れに乱れ、すさびにすさぶ私を憐れみ給うてやすくやすからしめんと欲する光の限りない悲心である」更に「欲覺、悲覺、害覺を生ぜず、欲想、悲想、害想を起さじ」との法藏菩薩の御誓の声である。

蓮如上人は「清淨光とは無貪の善根より生じ貪愛の心を治す、歡喜光とは無恚の善根より生じ悲嫌の心を治す、智慧光とは無痴の善根より生じ愚痴の暗を破る」と讃仰せられてゐる。

私はここに「怨は怨によりて消えず、怨は怨なきによりてのみ消ゆ」といふ法句經の聖句を想ふ。そして佛教教團が二派に分れて不和を生じた時の佛陀の教誨を念ふ。即ち佛の説話「梵達王が長寿王の国を犯し王と妃を殺害する。その時長寿王の子、長生王子が処刑の場に群衆に雜つて父の死を満腔の恨みをもつて眺めてゐるのを、父王が見出し、独語を装うて繰り返す。即ち、ク怨は怨なきによりてのみ消ゆ」と訓へるのである。然し王子の恨みは父王の遺言に順はず、巧みに仇敵梵達王に近づき信賴を深め近侍となる。時もよし狩獵に疲れた梵達王が近侍の長生王子の膝を枕に眠つた時王子は短刀を持つて王を一突きに殺害し父の怨を晴さうとした刹

他力信心〜と一向に他力に力を入れて頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛られて自力地獄の炎の中へほたんとおち入候其次に、かかるきたなき土凡夫を美しき黄金の膚になし下されと阿彌陀佛におし誂へに誂へばなしにしておいて、はや五体は佛染み成りたるやうに悪るすましなるも自力の張本人たるべく候。問うていはく、いか様に心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答て曰く、別にむつかしき仔細は不存候。ただ自力他力何のかのいふ芥もくたをさらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如來の御前に投げ出して地獄なりとも極樂なりとも、あなたさまの御はからひ次第遊され下さりませと御頼み申すばかりなり。如斯決定しての上には、なむあみだ佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に手長蜘蛛の行して人の目を霞め、世渡る雁のかりそめにも、我田へ水を引く盗み心をゆめゆめ持つべからず、しかる時はあながちに作り声をして念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り玉ふべし、是則、当流の安心とは申すなり、穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしのくれ

文政二年十二月二十九日

五十七歳 一茶

『編集後記』

年の暮が迫りました。念佛裡に本誌に御寄稿下さいます諸先生方に厚く御礼を申し上げ、又御味読下さる誌友の方々に蓬戸不出のままに深く謝し奉ることあります。

私の病氣も一年余り発作もなしに過ぎて頂きます。馬蹄も来春四十九を迎へようとして居ります。一茶は

月花に四十九年の無駄あるきと誌して居ります。それから華やかな江戸を去つて草深い信州の故郷に帰り、義弟仙六との和解も成つて、家を持ち妻を迎えて

明月の御覧の通り屠家かな
これがこのついのすみ家か雪五尺
と述べて居ります。そして五十七歳に及んでは

ともかくもあなたまかせの年の暮と誌して、地獄なりと極楽なりと、宿願の思召のままた、という信順の世界に帰して居ります。

年末勿々の中に煩悩熾盛の一茶が遂に帰すべき処に帰して念佛に恵まれた姿を偲びながら年の暮を送つて居ります。

▲「人生問題の解決」は、十二月二日近角先生御命日を迎え、追慕切なる余り、信界建現誌から頂きました。この原稿は昭和十一年六月御発表のものでありまして、日本全体が支那事変を前にして大混乱の時代であります。

この時高く万人の帰すべき道を掲げて下されたのであります。只今の日本は非常な闇にあえいで居るのであります。殺人、自殺、放火等々の記事は新聞を毎日埋めて居りその一人一人の原因を聞きましますにつけ痛まし

い限り増であります。それにつけましても「直

信の満足」といふ問題が、万人の帰すべき根本問題であるかを先生の御体験を中心に御説き下されてあります。この先生の衷心の御願がすこしでも地に潤へかしと念じつつ、先の洪恩を謝しまつることあります。

▲「法華経讚仰」の福島先生の原稿は一道会館での御法話を速記させて頂き皆様方にお送りいたします。長者窮子の譬、火宅三車の譬は佛陀の無限の悲心をそのままに感じ、唯々深く謝し奉るばかりであります。

実は親鸞聖人があまり法華経を御引用遊されたいことを長い間不審に私は思つてましたが、「一佛乘」の御言葉の中に法華経の全体が余すところなく聖人の信味に強けこんでゐて下さることを味ひ、長い謎を解けて頂きました。

▲「慈光録」は私の胸に常に燃きまつてやまぬ慈悲の煩悩を中心としたよし、佛の悲心を仰がせて頂いた次第であります。貪欲、愚痴の煩惱もこれに準じて味ふことであります。「罪障功德の体となる、氷と水の如くにて水多きに水多し、障り多きに徳多し」との御和讃がありますが、私の現状は氷が仲々水にとけないのであります。唯々かかる冷酷な私にも「その氷のあらう限り必ずとかし盡さずばおかぬとの彌陀佛の御誓のまこと一つにささへられるばかりであります。それにつけても

かなしなまよひもやみもそのままにただみ佛のむねにささぐる
との福島先生の御歌を頂き、又近角常観先生の御言葉で最も深く常音先生の御心に響いてゐられる金言
またやりそこなひ、またやりそこなひ

それだからお呆れない御慈悲でないか
の一句を毎日繰り返し仰ぐばかりであります
お呆れない無限の大悲心こそ私の畢竟依であります。

禿人記

昭和二十六年十二月十日 印刷
昭和二十六年十二月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一部金拾五円(郵税共)
一年分金百八拾円(郵税共)

名古屋市中区新大町二ノ二八

編集兼 花田正夫
発行人

名古屋市中区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市中区千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市中区新大町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

昭和二十六年十二月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

河原